

地域情報（県別）

【神奈川】認知症専門医と内科、外科、麻酔科医が外来と在宅を担当-内門大丈・メモリーケアクリニック湘南院長に聞く◆Vol.1

「身体合併症のある精神疾患患者の受け皿をつくりたい」

2024年10月25日（金）配信 m3.com地域版

認知症の早期対応や高齢者医療に注力しつつ、在宅医療とオンライン診療も行って「地域のかかりつけ医」を目指す医療機関が平塚市にある。「メモリーケアクリニック湘南」では専門性の異なる5人の常勤医体制で幅広く診療するほか、社会福祉士など多職種で連携しながら在宅医療や認知症対応に従事。こんな形態になったのは、内門大丈院長の「身体合併症のある精神疾患患者さんの受け皿をつくりたい」思いが背景にあった。（2024年8月30日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら



内門大丈氏（クリニック提供）

1日の外来患者数50～120人、在宅患者は約80人担当

——メモリーケアクリニック湘南の前身は2011年に開院し、現在は内科・老年内科・老年精神科を標榜しています。まずは、クリニックの成り立ちと概要をお聞かせください。

平塚市四之宮地区で運営していた湘南四之宮医院を2011年に継承し、「湘南いなほクリニック」を開院したことが始まりです。その後、より自分の理想とする医療を追求したいと2022年に四之宮内の別の場所に「メモリーケアクリニック湘南」を開設しました。

現在は地域のかかりつけ医を目指しつつ、「認知症の早期診断・早期治療」「高齢者の総合医療」「在宅医療・オンライン診療」——を軸に展開しています。1日の外来患者数は50～120人ほどで、患者さんの年代は小学生から高齢の方までと広く、また外国人患者さんに対しても翻訳アプリやAIなどを活用しながら診療しています。在宅医療では居宅と施設を合わせて約80人を担当しています。

——外来で広く診療しつつ、在宅・オンラインと診療方法も多彩です。すると、人的体制にも特長があるのでしょうか。

職員数は30人ほどで、常勤医は5人います。認知症の専門医である私のほか、内科医や外科医、麻酔科医といった専門性の異なる医師が複数いて、常勤医は全員外来と在宅の両方を行っていることは特長ではないでしょうか。ほか

の職種としては、看護師が1日に3、4人は勤務しており、こちらも在宅を兼任しています。また、2人いる社会福祉士も在宅に携わっているほか、当院は平塚市から認知症初期集中支援事業を受託しており、また神奈川県から連携型の認知症疾患医療センターに指定されているため、これらの事業も多職種で担っています。

「精神医学を科学的に学びたい」小阪憲司氏の教室へ

——内門先生は1996年に横浜市立大学医学部を卒業後、1998年に現NTT東日本伊豆病院の精神科に入職します。なぜ精神科の道に進んだのですか。

横浜市立大学は当時では珍しく、複数の診療科を回る研修体制を採用していました。これには「地域のかかりつけ医を育成しよう」という意図があったようですが、私は大学を卒業後、同大附属病院で2年間、内科や整形外科、麻酔科、救急科、そして精神科で研修を受けました。最終的に精神科を選んだのは、私の当時の医療への価値観として「より本質的だろう」と思ったためです。医師として経験を重ねた今、精神医学はあくまでも医療の体系の一つであると認識していますが、当時は肉体と精神を分けたとき、「より根源的ではないか」と感じたんですね。

——そして、2000年に横浜市立大学大学院に進学、レビー小体型認知症を発見した小阪憲司先生が教授を務めていた精神医学教室に入ります。

NTT東日本伊豆病院の精神科では、摂食障害や境界性人格障害などを抱えている若い人向けに精神療法を行う一方、同院は今でいう認知症疾患医療センターに指定されていたため、認知症の患者さんも担当していました。

小阪先生のグループに入ったのは、精神医学をより科学的・生物学的に学びたいと思ったためです。小阪先生は1976年にレビー小体型認知症の症例を世界で初めて報告した方で、認知症の診療・研究についてナラティブかつパイオロジカルにアプローチしていました。実は、NTT東日本伊豆病院時代に小阪先生が同院を訪問され、お話しさせていただく機会があったんですね。そのときに先生の情熱的な人柄にも魅力を感じ、身の振り方を決めました。

精神と身体の問題「誰もがなり得るからこそ受け皿を」

——そんな経緯があり、認知症の診療に注力するようになったのですね。一方、現在は専門性を持ちつつ、地域のかかりつけ医を目指しています。

私の経歴や医師としての価値観が影響していると思います。私は大学院を修了して米国メイヨークリニックに研究留学するなどした後、横浜南共済病院の神経科（現在の精神科）に入職しました。「精神科」と聞くと精神疾患を抱える患者さんだけを診る印象を持つかもしれませんが、NTT東日本伊豆病院と横浜南共済病院では身体合併症のある患者さんも診ていました。こういった方々は精神科からすると「身体症状があるから」、内科からすると「精神症状があるから」といったように、いずれも「診られない」と言われて行き場をなくしやすいのです。

身体的に問題があり、精神的にも問題がある。がんを抱えていて、家族関係も複雑——。こんな状況は、私を含めて誰もがなり得るのではないのでしょうか。「そんな人たちをサポートできる医療機関をつくりたい」という思いが、メモリーケアクリニック湘南開設の背景にあります。

当時は身体合併症のある患者さんに対応する精神科外来が少なかったため、遠方から車で来られるよう広い駐車場を備えられる土地を探し、また車いすの方も利用しやすいよう院内もゆとりがあるクリニックをつくりたいと考え、場所を変えて再スタートを切りました。医師として患者さんの最期まで診たい思いがあったため、外来だけでなく在宅医療も行い、また患者さんの利便性を高めたい思いから、通院歴のある方に対してはオンライン診療も行う——という今のスタイルになりました。

◆内門 大丈（うちかど・ひろたけ）氏

1996年横浜市立大学医学部卒。1998年に伊豆通信病院（現NTT東日本伊豆病院）精神科に入職し、2000年に横浜市立大学大学院（精神医学専攻）に進学。米国メイヨークリニックへの研究留学後、横浜南共済病院神経科部長などを経て2011

年に「湘南いなほクリニック」院長。2022年に「メモリーケアクリニック湘南」を開設。横浜市立大学医学部臨床教授。平塚市医師会副会長。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

